

## 《第6号》「子どものカミさま」

早川 克己((財)日本消費者協会会長)

「野性の麻だけはとりません。誤解されるから」。田島伸二さんは笑いながら説明した。サトウキビからは和紙そつくりの味わいの紙、青竹から薄緑色が美しい紙を作っていた。庭の隅に炉を築きどんな植物からでも紙がすけるという。児童文学者で識字教育の専門家。パキスタンで3人の使用人に紙漉きを教えたら、政府の高官がこの三人に教えを乞いに来るようになったとか。

コピー時代。裏の白い紙を見るたび、地べたに棒で文字を書いていた子どもたちがまぶたに浮かぶ。新聞報道ではアジア諸国から梱包用ダンボールの原材料に古紙の注文が増え、日本では調達に苦慮しているそう。我が家の古紙供出担当を任じている身としては得心すると同時に、家電の梱包用だけでなくノートや画用紙にも回って欲しいと念じてしまう。

新聞社勤めの頃新聞は「カミ」と言っていた。オフィス町内会が編んだ「白色度70がちょうど良い」(ぎょうせい刊)のオビには「世の中を変えていく人へ」とある。確かに紙は作る、使う、リサイクルする、そのすべてにわたって新しい社会の理念となりうるものだと思う。字の読み書きの訓練が必要な子どもたちにとっては単なるカミでなくて神でさえあるのだから。

以上